

パウロは、ピリピの教会の人々に「同じ思いとなるように」と勧めています。2章の1節には次のようにあります。「こういうわけですから、もしキリストにあって励ましがあられ、愛の慰めがあり、御霊の交わりがあり、愛情とあわれみがあるなら、私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。」。ここで「同じ愛の心を持ち」と言うのは、同じ神の愛を受けた者として互いに愛し合うということです。さらに、「心を合わせ、志を一つにして」と言う言葉には、一つの心となって戦うと言うニュアンスがあります。そのような深い一致が語られているのです。ここで語られているように同じ思いとなることができたならどんなに素晴らしいだろうかと思えます。又そのように思うのは、私たちが、同じ思いとなることの難しさを良く知っているからでしょう。私たちの人間関係は、同じ思いとなることが出来ないことからの、対立や、いざこざに満ちています。当時のピリピの教会にも、対立がありました。そして、それは、地上に建てられた全ての教会の現実でもあります。教会も又、人々が集まる場所であり、教会の交わりの中で、様々な人間関係の問題が生じるのです。そんな教会に向かって、「同じ思いとなる」というように語られているのです。しかし、考えて見ますと、私たちは皆、「同じ思いとなる」ために色々と努力しているようにも思えるのではないのでしょうか。この世で、私たちが人との交わりを形作ろうとして、様々な思想において同じ思いとなろうとしたり、趣味において同じ思いとなろうとします。しかし、パウロがここで語る「同じ思いとなる」と言うのは、そのような、何かの主張や、立場によって一致して、様々な集団が形成される時の「同じ思い」とは異なります。では教会において「同じ思いとなる」とはどのようなことなのでしょう。また「同じ思いとなる」ためにどうしたらよいのでしょうか。今日の箇所から学んでゆきたいと思いますが結論から言いますと「私たちが同じ思いを持つためには神なるキリストを信じ、キリストの前に共にへりくだる必要がある」ということです。主イエスを信じるだけでなく、主の前にへりくだる必要があります。

聖書を見てゆきたいと思えます。まず、ピリピの教会には大小問わず対立がありました。1章の15節以下には次のようにあります。「人々の中にはねたみや争いをもってキリストを宣べ伝える者もいますが、善意をもってする者もいます。一方の人たちは愛をもってキリストを伝え、私が福音を弁証するために立てられていることを認めています。他の人たちは純真な動機からではなく、党派心をもって、キリストを宣べ伝えており、投獄されている私をさらに苦しめるつもりなのです。」。この時、パウロは福音を宣教する中で、牢獄に捕らえられていました。それは人間的に考えれば不幸としか言えない出来事です。そのような中で、教会の一部の人々は、パウロの苦しみが福音の前進のための苦しみであることを知って、パウロを思いながら教会の業に励んだのです。しかし、もう一方で、パウロのことを快く思っていない人々がいて、パウロが教会にいない今がチャンスとばかりに自分たちの勢力拡大のために熱心に活動していたのです。この人々が「ねたみと争いの念にかられて」いたこと、更に「党派心」つまり派閥争いをしていたことが記されています。つまり、パウロの賜物をねたんでいたのです。パウロの賜物が教会の働きの中で大きく用いられていた。そのことに対するねたみを抱きながら、熱心に教会の働きに励んでいたのです。つまり、福音そのものに対立する人々との争いではなく、同じ教会の中にいる人々の、教会に仕える熱心さの背後にあった対立が見つめられているのです。人間が自己中心的な思いや虚栄心から活動する時、そこには必ず、嫉妬、ねたみ、争いが生じます。そして、そのようなねたみを生み出す自己中心的な思いは、私たちが、グループを作ること、つまり党派心と密接に結びついています。人間が仲良しグループを作り、自ら一致しようとする時、もちろん高い理想が掲げられるかもしれませんが、その背後では人間の自己中心的な思

いや虚栄心から来るねたみが支配していることがあるのです。そこでは、自分たちが気に入らない人々と敵対するということによって、党派が形作られるのです。そのような時、そのグループの中では同じ思いになっているようにも見えます。しかし、そのような人間の自己中心的な思いが支配する所には、決して、「同じ思いとなる」ということが生まれることはありません。

しかしパウロは、教会に自己中心的な思いからの対立がある現実を前にして、教会の人々を裁く言葉を口にしませんでした。むしろ、1章18節にあるように、「すると、どういうことになりますか。つまり、見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆるしかたで、キリストが宣べ伝えられているのであって、このことを私は喜んでいきます。」と語ります。伝道が進められる時、そこに用いられ、たずさわる人間の思いには、善意や悪意、様々なものがあるけれども、そこで伝道が進められているのであるのだから、それを喜ぶと言うのです。皮肉って言っているのではありません。このような喜びを語ることができたのは、パウロが、徹底的に、伝道を進めるのは人間の力や、人間の善い業、善意から生じた行い等ではなく、様々な欠けがある人間を用いられる神様の御業なのだとすることをわきまえているからなのです。ですから教会の業の背後に人間の思いが生み出す対立があっても、そのことをも用いて働かされている神様の御業を覚えて喜ぶのです。このパウロの喜びの中に、信仰者の喜びが語られています。私たちは、教会の働きの背後にある人間的思いや対立を見つめて、それを裁くのではなく、むしろ喜ぶ姿勢が大切なのです。しかし、もちろん、この神様の御業に信頼する態度は、教会に生じた人間的思いによる対立状態に対して、何もせずに、ほっておいても良いということではありません。神の御前に共に心からへりくだる時が来ることを祈り求めていく必要があります。共にへりくだる最大の時は礼拝です。ですからこの礼拝にどれだけ共に主の前にへりくだって出ているかがカギとなります。信仰者は、一方で、人間的な思いによって行われる業や、それが生み出す対立の中でも神様が働かれていることを覚えて喜びますが、もう一方で、対立関係にある人々を裁くことなく、福音の喜びを共にし、同じ思いとなることを求めて行かなくてはならないのです。だからこそ、パウロは、神様に委ねつつも、教会の人々に勧めを語っているのです。2節の終わりでパウロは、同じ思いになることによって「私の喜びが満たされるように」と語っています。つまり、パウロはどんなに苦しい状態にあっても喜ぶのですが、そこで、事実、人々が同じ思いに成っていくことが、実現して行くのであれば、その喜びが益々満たされていくと言うのです。

では一体、ここで語られている「同じ思い」とはどのようなものなのでしょう。それは、私たちが気の合う仲良し倶楽部を作ると言うようなことではありません。考え方が同じ、同士を集めると言うことでもありません。そのような人間が掲げる主義、主張によって同じ思いになろうとするところには、必ず、それとは異なる思いをもっている人々との対立が生まれます。例えば「平和」と言うような、人間が普遍的に求めているようなことによって一致しようとする場合であっても、人間の主義、主張が掲げられている限り、そこで、「平和」の在り方をめぐって意見の対立が生じるでしょう。私たちが、何か特定の考え方によって一つになろうとする時、必ず、そこには異なる意見が生じるのです。そして、そこには、少なからず、人間の自己中心的な思いや虚栄心も潜んでいるのです。ここで、1節の言葉に注目したいと思います。ここには、「キリストにあって励まし」、「愛の慰め」、「御霊の交わり」、そして、「愛情とあわれみ」というものが見つめられています。それらがあるのであれば、それによって思いを一つにしなさいと言うのです。そのようなことを言われると、「それらがあればの話であって、私たちには、これらのものが自分にあるとは思えない」と思うかもしれません。そもそも、思いを一つにするための根拠となるものがないのだから、思いを一つにしろなどというのは無理な話だと感じるかもしれません。しかし、ここで「もし～あるなら」と言われている

言葉は、「いくらかでも～すでに与えられているのであるから」とも訳せます。いや、むしろそのニュアンスの方が強いと思います。つまりここでは「もし～あるならば」と条件や仮定を語っているのではなく、既に、あなたがたはこれらのものが与えられていると語られているのです。ここで「同じ思いとなる」と言うのは、既に与えられたものを根拠にして形作られるものなのです。人間が生み出すものによって同じ思いとなるのではないのです。パウロはここで「いくらかでもあるのだから」と言いますがこれはパウロなりの言い回しです。本当は、それが十分に与えられているにもかかわらず、人々は、そのことに気が付かない。そんな鈍感な人々に「いくらかでも」と言うのです。あなたがたも、教会に連なっている以上、キリストの励まし、愛の慰め、霊による交わりが与えられていることをいくらかは知っているでしょうと言うのです。そして、そのことをほんの少しでも見つめるのであれば、そのことによって同じ思いを抱くことができると言うのです。

そして、そのよう祝福が与えられていることを見つめつつ、同じ思いとなる時に、生まれるのが、3～4節に語られている歩みです。「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。」とあります。これが同じ思いを抱くことの帰結であり、又、このような歩みが生まれていく時に同じ思いを抱く者へとされていくのです。「自己中心」や「虚栄心」と言うのは、自分の利益のみを追求する姿勢です。それは人々に党派心を生みます。そのような、私たちの中にある思いを捨て、むしろ、へりくだると言うことを見つめられているのです。そして、神の前にへりくだる姿勢こそが「同じ思い」を生んでいくのです。私たちはへりくだりにおいて一つとなることが出来るのです。「心を合わせ」と言う言葉は、フォロネインと言う言葉です。そして「へりくだって」と訳されている言葉は、タペイノフォロネインと言う言葉で、タペイノス「へりくだった」という言葉と、フォロネイン「心を合わせ」が結びついているのです。つまり、「心を合わせ」と言われている箇所と、「へりくだって」という箇所には同じ言葉を見出すことが出来るのです。親戚みたいなことばです。更に、この手紙において、フォロネインと言う言葉は、救い主、キリストと結びつけられて用いられています。事実、この後の5節以下には、キリストのへりくだりが見つめられているのです。「同じ思いをもつ」とは、キリストが示して下さったへりくだりに生かされることに他ならないのです。神の子でありながら人間のために、世に来て下さった主イエスの姿の中に、神様が私たちに示して下さるへりくだりがあります。そのキリストの姿に倣うことが求められているのです。様々な主張や人間的思いによって、人間が自分たちの力によって「同じ思い」となろうとするのではなく、それぞれが、様々な主張や、人間的な思いをもっているにせよ、キリストを示され、キリストに倣い、キリストの前にへりくだると言うことにおいて「同じ思いとなる」共同体が生まれるのです。

4節には、「自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。」とあります。ここでは、自分の利益だけでなく他人の利益も考えるように努めなさいと語られているように読めます。しかし、更に進んで、ここでは、他人の賜物を見つめるようにと言うことができます。「自分のこと」と言うのは、自分が神様から与えられている賜物のことです。自分の賜物を過大評価するのではなく、他人が神様から与えられた賜物に注目するようというのです。そもそも、ピリピ教会に生まれた対立は、賜物をねたむ思いによって生じたのです。つまり、宣教の熱心さ、神様に仕える働きの熱心さの背後での人間的な思いが問題なのです。自分が教会の業に用いられているのは、神様からの賜物であり、周囲の人々も又、同じ、キリストの賜物によって御業のために用いられている。そのことを見つめる時に、本当の意味で、ねたむ思いから解放されていくのです。そして、自分に与えられている賜物も他人に与えられている賜物も共に神様から与えられたものとして喜びつつ、教会の業のため

に用いる者とされるのです。つまり、同じ思いになって、互いにへりくだると言うのは、自分と他人に与えられたキリストの賜物を見つめ、それが用いられて神様が讃えられていることを喜びとして歩むことに他なりません。へりくだるということにおいて同じ思いになる時、聖霊によって与えられる賜物に目を向けつつ、お互いを評価する者とされていくのです。

どうか共にキリストの前にへりくだり、そこにおいて与えられる同じ思い、一致をもって主の教会を建て上げてゆきたいと思います。